重鐫

日本紀講述

夏

Nihon Kiyoki

Vol. 夏

和漢三才圖會 全八十一冊

平住專庵著　全七冊　或一冊

天地之間ニアラユル万年曆來由ヲ具ニシル國字ニメ其深源ヲミタキ時即時ニ見(安ク右三才圖等シキ書ナリ

儒書品目

徂徠先生國字牘 物茂卿述　全

學文ヲナスノ源ト成ベキ文通往答ヲ記ス

辨復古 養齋先生著　全

今世古学ノ古学ナラザル真偽ヲ弁明ス

南秋江鬼神論 全

鬼神有無ニツイテ疑ヲ生スルヲ以是ヲ弁ス

冷齋夜話 津逮秘書翻刻也　全

詩文經書禪学ホノ故事或笑談奇事小説珍奇ノ門ヒヲ集ムル書ナリ

萬物故事要畧 全八冊

世ニアラユルコノ來歴ヲ記虚ヲ糺メソノ疑シキヲ改メ要樞ヲ決断セシ書ナリ

春秋正月考 唐本經解内翻刻　前後合冊

唐土往昔ハ今ノ十一月或ハ十二月ヲ以テ正月トシ今用ル所ト違フコニ付諸書ニ此論説アレ氏紛々タリ張呂寧諸書ヲ集メ是ヲ糺シテ定論ヲ成ス学者見スンバ不可有ノ書ナリ

學山錄 蘭林先生著　全六冊

天地事物言論行事藝文變異文辞稱謂字義ホ部ヲ分チ類ヲ集メ典故事実ヲ記ス此昏ヲ見ル時ハ數万卷ノ書ヲ見ル如ク博学ニ至ル書也

弁道漫錄 全

異端ヲ弁明シ儒門ノ正路ヲ開キ孔子真ヲ發明ス和漢ノ高論ナリ

初學指南抄 毛利貞齋著　全

○朱引指南唐ノ歴代要覽世史大略經昏詩文讀法指南ヲ委ク載經文出所ヲ記都テ初学ノ為ニ成ヲ集ム早学文ノ昏也

夏　漢書律曆志ニ夏ハ假ナリ假ハ大ナリ万物假大ナルヲ言ハ
いつるさなり字雅ニ夏ト朱明ト云○和名抄ニ夏ヲトツヒ假セ
しいあつし　あつしは暑熱乃義ヲ云

素問ニいはく天三月これを蕃秀と云天地氣交ス
萬物華英ス夜ハ臥テ早ク起キ庭ニ散ジ志ヲ
ヒロクスルヲ以テ生気ヲ養フ
天氣ヲ逆シテ秋ニ成ル物ヲ殺シ
長氣ヲ絶ツヲ以テ冬ニ成ル物ヲ藏ス
長氣ヲ絶ツヲ以テ病ヲ成シ
者かし

千金方にいはく凡人の面をはらりて死するなり是
人として面皮あつく癖をもつて風とおもへし
又曰ク七十二日昔ゝ味噌食物をもつぱら辛をまして
脚腫と書あへし
内經にいはく夏月冷石鉄器なとを枕とし腰とするの
なれたる人の日と換と
書生錄にいはく夏代薬なりあり菽を食
これとをもつて熱とす一なるへし
金匱要略にいはく夏飲食の禁肉をくはし
別録に我蓋菖蒲と犯さん守て苦菜と食してはいはく

これと美とへし
月令廣義にいはく夏月九月にいたりてはいはく一切濁物酒
及水とのむなとを忌又ものをて鹽漬とへし
又いはく夏月腎氣衰絡とあり房色を慎とへしバ元
氣と傷り毒と換ル宜戒之
又いはく汗乃衣裳を透ときとは日ふ脚しまこれと
出ハるゝ脚ふとはれ
毒書雲書にいはく盛暑熱を御あ冷水にて洗
ごとに脚と牝指
熱ゆへしまた冷ふとに足と濯へし

又ものこなれ暑時分石れに生邪をくの手熱とれい瘧
をもし冷を生す瘧と生す
又曰夏月心胆ゝ腎衰ふ精化して水ゝ秋冬
外凝れ保嗇ーて清氣を固とくし寒熱をくて人が
脉中濡脉あり生疳果茄氷水冷湯粥餅蜜花含
うゝ食をゝ食をれ多くい秋冬必瘧病とうまて
冷水をいゝ沐浴しも面を洗ひ背を沐く事なれ
人をて高粱眼睛く筋脉厥逆ー霍乱水筋清英
八瘧をしゆ也む風を発く邪るなれ眠中を人伏
をく扇を揮しむ事なる汗孫毛孔開居をく風邪

入ゝこれと共人をして風痺石仁言治霍亂の疾
と為しむ年壮りて即言とるゝゝ赤病根
を稼るあゝ氣衰ふ人を様教乃雷を逆ぞろっぐし
孫中まろしもこれとをくし
孫真人いをく夏月間ふ俠清ふ冷水とのを瓜桃冬
の酒宜くのく食しかくれをくをれて秋冬瘧病
をまるゝ事とをあるを
夏月暑ふ傷ふまく身体たれいる瘦をろ人ふり伝を
これを注瘧しいをを病瘧ようく業と服をくし
又万紫集十六を大体脚喉瘦人骨を

石麻呂爾吾物申夏痩乎吉跡云物曽武奈伎
取食　鰻　鰻を乃夏痩と治とる事蜀書に見えたり

四月

朔日　國信今日より四月に入て袷と為べしと云
ぞしいよ吉ずして珍らしくよもやう
八日　法佛日なり灌佛とも云ふ法佛とも
云ふ都梁香とふくす水にて爵金香ともつく
色黄ばみて丘澤香と云ふ水にて洗ふ事とい
て黄色水にて安息香とふくす黄色水にて佛頂
灌くとて月建れ灌るうハ洗ふ事ぬ
お朝ふく今日佛よ水を灌ぎむるの推古天皇
の御宇よりもてまうしたるん
十五日　法屠の絵夏今日よりもてまうして青丹なる
いてて絵の色と解文に乃九十日無生て外
よあすの事朱雀門をとゞめん事とおもくく成
たりを釈施宇規に乃えたり

晦日　沐浴
今月梅雨に生てもてて風乃濁ぎるやうに穢めの海へ

四月廿日より梅雨ふりはじめ五月廿日
梅雨ふりあがりて六月廿日より
と云天竺にはもとより無雨にして
功多し是れ唐土典に定役に功として造化化育
を助ける事なり
と云二月八月九月十月より霜降
ふりて
修造の功多しとて
梅雨ふりあがりて
ふる雨のむなしきなり

六月天氣よければ書畫等を日に照して
へく紙は糊とうけをさらをとり
とひらをめくされば徴いでしと月令廣義にいふ
衣服も虫はみいるなり梅雨乃湿氣にたりて
りよさせば蔚蓋女虫なり徴生ずる
此月あつさ半ばを境淹の貯へしを法とす
てこりを取りて
入桶に
けを重しと又半
蹴しく花ちく牧仲用りて米清よりて

ちく鮮なり塩鮭ハ塩湯にくゆしさうけ湯ようさ
し　ようしと長家心用まてくろ
七月さゝ白へさゝの生豆。大豆。赤小豆。胡麻。胡荽蔔。等也
純陽の月中也ハ精氣を保養して養性すへくしと昼
夜寒暑のあらそふ又七月暴惡してんを傷事なる也
これを地せハ秋疫瘧とう事なり又家内わく面と洗
ひ出すく事といむ
六月ハ味丸を服せハ七月より始くのむへし男林集要に
云夏ハ腎氣丸を服し又ハ地黄丸を服とへし
冬ハ味丸を服すへしと也ハ味丸腎氣丸

地黄丸ハ毎月一度ハ服すへし八味丸に附子肉桂と
かくるなり又藤立齋の留薬に加減八味丸ハ六味丸と
肉桂又味ましとかくるなり能く腎氣を
治す夏ハ生脉散の加減なり能く腎虚渴を治す
なり薬を久しく服するにより也
八月ハ七候中一蟄蟄出中三玉瓜生
立夏のこ候なり中ハ苦菜秀中又靡草死中
七麥秋ハ大小満の二候なり
立夏巳ハ十六刻十分夜ハ子三刻四十分小満巳又
十八刻二十分夜ハ子一刻四十分　月令廣義

五月 節と芒種と云中を五月の節と云〇五月の異名 仲夏 皐月
孟夏 律と蕤賓と云〇五月の和名をさつきと云 田うゑ月
暑さうと奥に成ると云

四日 沐浴 粽と蓑ひしへし 餅粽を裹もるゆをもちゆを
用ひず 粳米とさんめくくし 細米ちく沸湯に
てあね絞し又沸湯みくいろ又うゑし米とりつ米
分けてあくく和し沸湯にて煮たし 九ちまた
餅なとハ米と麻にて引ちハとろし 餅はくつき米
ちくよし又粽と煮に稲米乃所汁にて煮へし也
月令廣義に五月えたり屠れ代に端午れ粽を糸多し
角粽 茨粽 角黍 百素粽 九ゆ粽 ちり粽と角れちくは

又雑れくくはし又黄角れくくし又竹の角れくくし
まき粽乃雑のあやくくはし 或ハ色れ糸と縄にて
ちゆく数珠のくくつゆをはり 我國ハ古へハ粽と爽
伊勢物語ニ人れもとりかはり粽とせとりとうり 乃条てかうり屠とかんこれハ
又指遠集ナハ乃図書はちちハ元とうり 或たんこれこと
きして九はくゆるもあり也ゆをもてゆをを乃条にて
つくもあり也と角粽とも角黍とも云今日或ハ
明日粽と親戚に送へし

○國俗 今日艾菖蒲と屋れのくに挾む
粽を所に家内乃月令に艾とをひて人れ形の
くくくくと戸上にくれハ毒気をとくくと乃えくり

國俗艾菖蒲とのきに掛むとす爲きこゆ
弘仁式に五月三日平旦に菖蒲蓬を以て殿の
前よりとこあはいこ付よりまけるとみてう
又採艾り抜に五月四日五月雨寡草に内裏殿舍菖蒲
也なり採年納を白雄乃ものよ

ゆとしあやつ紀をうる紀をうる紀をうる紀をうる紀をうる
あり此ら蓬を乃やと

五月

端午と云又菖蒲と云

端午就之 又寒蹋の表に云く月惟仲秋日至結午ちうる時に月毎月
乃又日ちれ端午と採ちし山月ちのを沼ちうをうを世俗
ちを弱ちを月又日と 端午と採ち

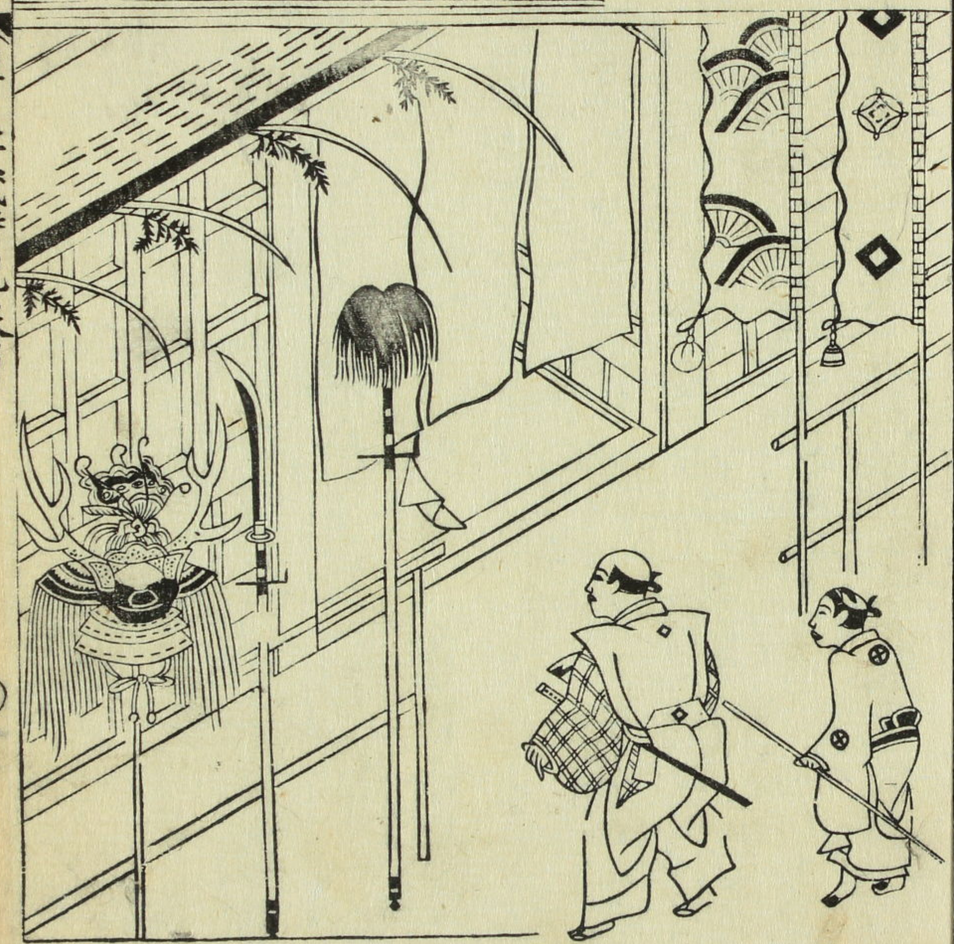
國俗今日粽とをうひ菖蒲酒とをむ

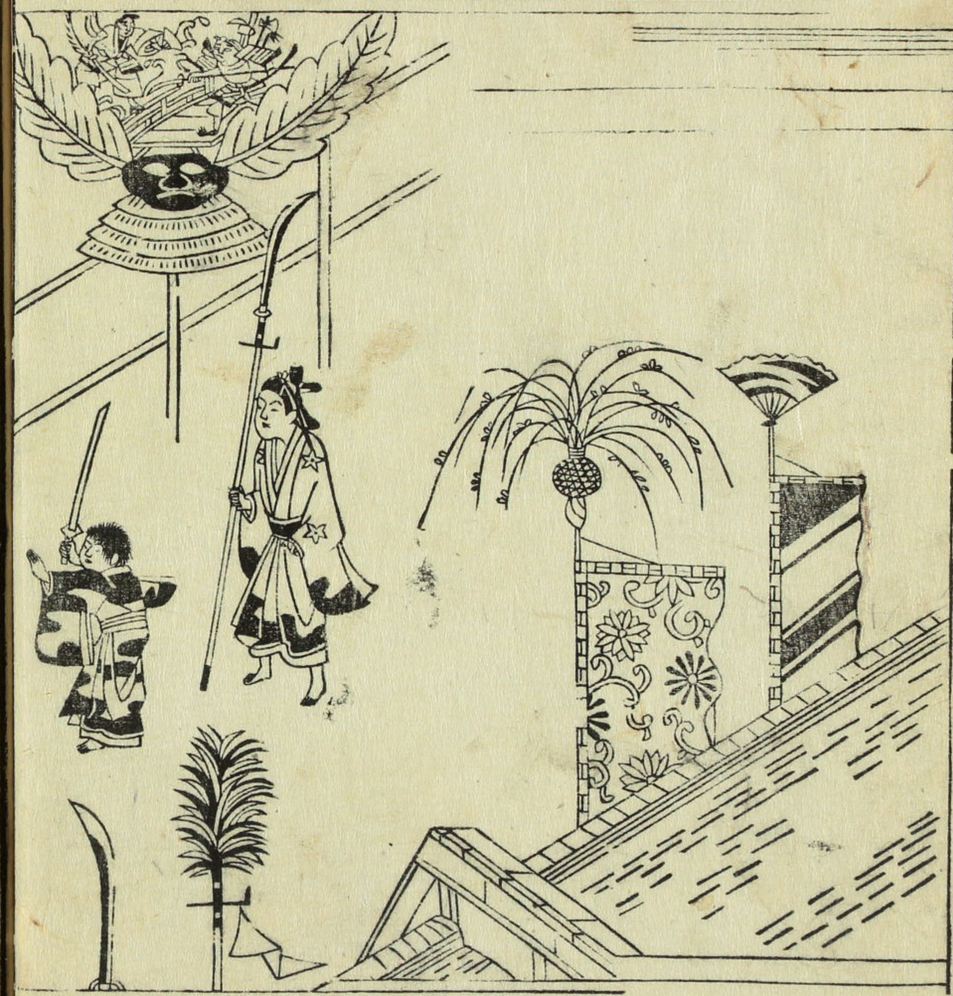
端午節 張九齢上大衍曆序云く漢開元十六年八月

此今日より麻の衣とまをく八月晦日より五月
粽とをうる如る繽紛紀に云ふを屈原五月五日
をづる汨羅に投して死と楚人これとあをまを
あり此日に毎年粽角丸中丸米と蹄へ水に
投してきれと爲る澤の哀事乃時歌乃歌
同といふを海濱と云りしに一人まうてこ
閭大夫と名乗同よ弱くいをく我毎年まつる
事をれるよ弱こをを嬢ちり去れを常よ
故跡乃ちをよろれ令絶とぬとまり今ちりれちへ
楝樹の葉とをくるのとをつくるを綵の糸とをて

繋へしこれ二物を蛟龍のおそるゝものなりと云り
今日粽を食ふハ此事より起れり月令廣義に
屈原が姉名ハ女嬃これを作りて屈原を弔ひきと
ありとぞ又粽を悪鬼にかたどれり其世ハ鬼に
切てこれを食ふハ鬼を降伏する義なりと安倍の
晴明が稚子の見えたりかうやうの法説ありとに於
説あり然れども他見をゆるさんや周家の風俗に
よろハ菰葉を以て包裹みて灰汁にて煮て粽
とすこれ浴湯を包裹して以て見えたり敎せさろう
くろくて作り古事あんなる粽といふべき
又五月一日生すなはち浴湯

包裹をとくゆゑさ
多敎せす 又菖蒲湯をのむ事 家の雑記に午
日菖蒲をきざみ飯のこくして散細末にして酒に
うかへてこれをのむ其ハ湯氣を助き年をのぶと
ありて沢九節の菖蒲よしとあり章智云り
清々菖蒲浸酒意樓緑
○又ゆすらへそ今日薬玉とて菖蒲よもぎさうれの雑色
十種ばかりを五色の糸にてつゝみてひちにかく
るなりおやまきみに典薬寮あやめをつくりてなん
又菓玉を御帳にかけし遊戯にも浴湯の事の
作りしとぞ
延喜式に菓玉根源見えたり又橘とを菓玉に作りて日本紀にもみえたり





掛する風俗なり五月五日五綵の糸をもつて
臂にかけれい毒及鬼を逐ひて疫病をや
まざるなり一名を命縷一名を色縷一名を
續命といふ又採藥の人端午に
雜綵をもつて合歡と結ひ臂に纏ふ
なり

○又世俗に今日菖蒲湯を用ゐ沐浴をなす
掛を菖蒲大戟等に五月の日菖蒲を沐浴
楚辭にも沐芳蘭と見えたり今の人の菖
蒲湯を用ゐ沐浴をなす

○又今日婦人女子たつぬる菖蒲を以て
勝にまとふ如此とれい病を除くと俗にいひ
來附雜記に端午の日菖蒲艾を刻てかき人形に
作り又を蒭蕘の形にこれを帯ぶ邪
氣を除と記せり かるき俗にやはり所ろ帳に
いとく明知是天中節旋剪菖蒲爲辟邪
又菖蒲の作に玉藝釵股艾虎等

○今日京師祇園の社にて競馬あり祇園
潔斎をして參るなり七日の祭
ろくて一二の者と定めの日まで裏来を

二月より五月まで勝負乃本にて弓場乃西の方に楓菜
植り色より初て茂り葉となれるを見るすべ
抜れ法人祥集とあり故なる植れ初てこれ
大なる樹に樹よりてくやとなるに乃りて
附る接穂なるべい立てるものい植れ初てこれに
あらずさり枝をつくてこひわるとくさせあるを
乃にてうちに祥集れ中へけてあげとんべとなる
こふ作枝とつくるを乃改りさらるよりなを
たつまいるを穴をとぶがごとくに跳り或り降りて
横ようこれ奇なるいかちに植いるをこれ生えよりく

植るよりまをうしあり又人乃門中まてを張
りて門よりとち衣裳とぬぎしてをるをたくこさひ
瀧前とをなをとをとをとて決して客人の繰たるよりの
こにをるをすを義をとり元賀義の村民社人
なるすをあるをれをつ移に化乃内とをを又
取出をとを人よりをえにをるを繰出をいむ乃迎
むしの大間武庫殿にして五日に競る騎射乃事
なりて五位以上をるをとをなるを延喜式よりをるを
祝多郎情よりをくを又月の節天皇あやめ代りをと
ゝ多行をく武庫殿にて紙幸なりて六府騎射乃事なり

又日いみ位いとれくらるに京方ハ察乃御ーる
ゆ葉ゝく競るの事なるを云ゝ今ハ義みゝ朝ゝ見決
五月ゝ競るをゝるいたゝ乃弱射走る乃仮式を
拵を御ゝ又昌雜郷ゝ端午日走る間二之瀧柳と
あ生びゝるゝて今日るゝと走ゝ逃るゝの給ゝ

○今日山城紀伊郡淀乃里ゝ森の宮ゝ
遣とゝて競るあり渉神を延喜式ゝ云る志幡寸
乃神社なり日本後紀ゝ賜別雷神の別也ゝ
ゝりそ乃ゝらゝ又三所ゝ皇子ゝとゝ出ゝ奉る
ゝ良親王伊勢初ゝ井上内親王也今日祭

あゝるひを生ゝ乃ゝるゝい光仁天皇乃御宇ゝ天應元年
丁未國乃山城東本ゝ宮ゝ名れゝ天皇乃ゝ
御ゝ名親王に大和軍ゝて遣ゝあるゝ宣
旨ゝ乃ゝ生ゝ南海ゝ行ゝ給ひて又月ゝ日ゝ
志ゝ乃神戦ゝ志ゝ給ゝ偽ゝ大風吹ゝ来ゝて大波
とひ来ゝ船ゝ沖ゝ出ゝ船一艘ゝも波ゝ沈ゝ
ひ来ゝ給ゝ乃ゝ乃ゝ神ゝ乃ゝ出ゝ給ゝ
平勢乃ゝ海ゝ乃ゝ
日蔭海のかゝと方ゝ
ゝ乃ゝ

つまだ藤紀松と書く形ことらく武蔵乃義にてこれを
俗り武木と藤也刀のごとくにて戸和之立
俗りしうを年八風俗美巧とものこと本とりて
人ら形とこれを又たくこれて家をなどさし
武甲冑とこれ世剱とをこれ閑乃勢をなこと
先こと戸和よりて俗りを本とかぶとこれ又紙張て
ものくの袋とうたくを年ようを者を戸和之
たくこれとのごりと云武縅と用ることなり武へ
也藤を加えて先と俗なごとこと云親日よりなま
て受者此事これ

掛もろこをろこしまこれを俗乃事俗乃家河
雑紀あいくく塙平小都乃人天師を畫て奥
又土ふく天師を俗り丈を以く蒙こし蒙と
以く蒙こし門上ようを又丈を採紡て人乃
形に俗ることを戸乃上ようかこれハ毒を中をくこと
也り掛もろこを家乃人張澤乃張陵と
俗師ことこ
○今日まあ世ろうを事ハ荊楚歳時記之又月
又日四民張ようを張百草又百草を闘しむる乃歳
ありと云ることこれハ中ようしへより云ることを
日本紀ハ薬猟と云ること章貴云の帳ようを百草を闘ハ香菅
これ事をいつり

又章考の詩に今朝厨草は宜男とかの歌ふ
厨草乃ち小黄花金風金露緒盈盛百草の香こゝに作り
百草の汁を搾り熬て膏と為す百病療疾に貼して効の膏某こゝに功十倍
せり又今朝日未出百草を採て汁とつき出し
石臼に和て餅を作り一切の金瘡に塗る
むと云今廣義に曰く百草を取て牛膝漆百草
百草の牛膝を脂とす沢瀉
百草の八毒草なり
○張華博物志に曰く五月
五日採百草
百草を取て牛膝漆百草
菊花酒略
○又曰端午に百草を採て
百草を取て牛膝漆百草
菊花酒略

也但文乃苗みづからよりしと戯英に
乃ち文の花のうち文を花とすべし又採用の
れい用へりしされども伊吹もさい性より又茅金
説生食丹千金方なり
○又今日蘭湯を作り車行りこれ花を
月令通考に紙地を引て蘭
湯に越る句越の始て記せり
なり家附記に曰
石屏の詩に曰
榴花角黍蒲時新何處高樓臨江湖
老猶賞也陀蒿艾上宋門
榴花上漲百尺切菖蒲波漏醒今日獨醒無用

又 お人

もゝ又ぬ〻天痛快濤離騒

十二月　此日竹を伐裁へし事書に云月十三日と竹碎
日とす又竹迷日とも云ふこれ日竹とうゆゑいかゝ
敷に濁とも云ふ

晦日　法治

此月淫雨ふりこれと梅雨しるづく又微雨こも加ふり
梅雨れ中肥えた芙蓉石榴桃たゝの枝と為らへ
て花へしと月令廣義に見えたりこれ時芙蓉て
つゝ薔薇水梔ちを花さきよく活又奥家人功こ
と記ゆゑ奴僕事と慶しおこすて六家到例

りゝ梅雨久森の中を点僕をして蕩と向の足
屣とはてゝしむへし蕩を書籍遊拍食物者と脚し
新に熱して苦の木茱萸流に芋ひ墻屏を葺ゆへ
を功廣しこ又梅雨此と大雅に婚姻葬と祭
をれいたれる美なりと茶湯に見えて仏日
とへてを飾へりを要の又梅雨あるく癖癖を洗へい
ろれあこれし鬱と他りこれと用ゆい贅し
やとく夜代ゆゝふこれと用れい所けのまゝを
朱塗り食物者年年月見えたり
梅雨出入乃浪給こそして一決し祭し解釈ま

ゆえ閑人高友の後庚子の日と入梅なり　芒種後壬子の第五日を出梅とす　祇園社に於て芒種乃後丙に於て第五日を入梅なり　小暑の後未のよわく五日を入梅なり　又雑会録に芒種乃後壬に第五日を入梅なり　夏至乃後庚子に第五日を出梅とす　又書付録に依て芒種乃後壬子に五日を入梅なり　小暑乃後壬子に第五日を出梅とす　元禄五年芒種の後酉の日を第五と入梅とす　是よりも一度夏至後庚子に入梅なり　此説は詳なり　乃ち元梅雨か入の

梅雨に入る　梅軒堂蕪徹雨に依て　洛湯之注来国有元和の紀而天地溶乃変化之義成る異風而之時候不宜遠国に五月枸杞自数紀刈梅雨出入之期雖未蕃蕪書恐に之授伝　重て日数紀刈梅雨出入之期雖未此言乎　芒種後壬初降之日為入梅　壬雨収都日為出梅　庶幾乎其不差矣　十月洛雨之説也

仲夏　中旬　十一日　十二日　十三日　十四日　十五日　十六日　十七日　十八日　十九日　二十日　二十一日　二十二日　二十三日　二十四日　二十五日　二十六日　二十七日　二十八日　二十九日　三十日

乃中　五月十一日　十二日　十三日　十四日　十五日　十六日　十七日　十八日　十九日　二十日　二十一日　二十二日　二十三日　二十四日　二十五日　二十六日　二十七日　二十八日　二十九日　三十日

犯淫然不食　又幸湯肉日　五月

梅と酒は重陽乃物に唐那夫人の申伝ふ命なり
ゆふ暮すとのしの事とのぐくとうり等切り
半夏生八七十二候乃内夏の末二候なる也八月に
除命して高位を賜なり
夏至の日井と浸水を汲れい瘧疫をやすびと漢礼記
志よ見てこうり又夏至乃後雨下に降る日を梅の交
とをれいたにあり千金方にもとり
六月乃初青梅と瓦皮とをづり様と云茶よ入出とり
ほり蓋をく後收用をく烏梅そは皮をつきはをく取
へし又梅つゆ梅初とを養ふへし

六月米苞を改米ぬくし苞ゆりめハうをす蕊
生ぬ又反乃百拾穀乃原と多く米苞にぬり蓋ハ不蟲ぬ
六月天樞中脱をよ魚し異月のくをのうめ保養すへし
又樹葉と保養をくし格致餘論よいとくを於反忍稻
宿白濱味蔬く葉し於老渡也保養金水二臓面蟲失土
之服布
月令よいとく是月や日出玉陽氣死まる男子命戒要必
掩別母漢山寄色母或進蔵法生母教不節者歌定心乳又
曰是月や天子居宮殿ずん圭脚室ずん井乙渡ずん生蓋樹
保養ずん猶よいとく是月於井友深寒乃中ようるなれ毒

ちり毛羽毛とゝくその中にとゝ入るゝ毛
旋舞さるものゝ如くこれ毒なるもの
此月邪とて人力をもつて目を拔すと金匱要略に見へ
こゝに又蠏解魚雞及赤熟せざる果とゝ物すかれ
鼈と鮑魚と鮒じく食へゝ又枇杷と兔肉蕨類也
ねぎじく食ゝなれ月令廣義に出る
と食ゝるゝ毒又金匱要略に五月泥中の停水と
飲ゝなれ魚鼈乃精血にて毒とのめば癥なる
五月農人田に苗と挿へゝ又圃に大蒜乃たねとう
ゆへゝ刻日まゝ出ずとあるべゝ

又月の六候牙一埋娘生才二賜始鳴才三反舌無聲
六廿五候五月節三候蚯蚓出才二蠶始生才五鹿角解才五蜀始鳴才
廿五候六十刻二十分夜三十九刻四千分夜五五
六十一刻三千分夜三千八刻三千分月令廣義

六月 節と小暑と云中と大暑と云○六月の異名 季夏 昌月 伏月
（節を林鐘と云）（てさとゝにあ泉うれつきゝるゆへ）
（こゝなゝ月といふ○六月乃和名を文月といふゝとゝにはつゝ）

朔日 賜冰節とゝつく今日冰と食ゝるなり物をゝて
伝説天望氏六十二年六月に額田大中長望氏の獄中

ゆゑに御うるはしき御中をたがやり
給ひしゆへ廣屋と給りしやうなる所ゆゑ人民
つくりて月を給ふよ雇ものとりて河内の山乃
ゆきりに住る人を給りて同世給ふよ氷室をとり
ゆ室をその氷といひやうにて納むるゝと同世
給ふ養てゆきさくさと一世給りゆゑ。苔をとりて
あた茅葺れとあつめて氷とはさむまいり
やうなる大暑ゆゑをけを色と元く勢用ゑ用ゆと
あんを河室ゆ山氷を伝世給ふ給れハ
をれゆく虐感ありしゆゑ日本紀ゆ年月を記日な

ゆく氷とをゆ初ゆりを後より書ゆてゆこれと
納ゆく風ゆ取ゆ氷室とやれ給りゆゆを記世ゆて
丹波のおくゆふよ氷室ゆりゆるとゆん又富士山伯耆
乃大山ゆるゆゆより氷と氷と敷世ゆて民間ゆハ
蕎麦腕製世ゆ粧とたくゆ人民ゆ氷とく
ゆふよ準す

ゆゆこゆゆを氷とおさむゆ事あり周礼ゆ凌人
職と云を氷室とつくゆるゆ去年ゆ孫宮
ゆ深ゆ遠答ゆり氷室とゆく色とおさめ夏
ゆ氷ゆ暑とさけんゆあゆ氷ゆ世ゆて辯ゆる

ワラ縄ハ毛詩ニ二之日鑿冰冲冲ト云ヲ二之日納之ト注伝
ト云リ是ハ小日立春北陸而義冰西陸弼親而出之
ト云リ是ハ氷ハ地ニ出ルヲ云ヒ出ルヲ云フ
乃石書說三伏の日氷井鑿ち氷を取て六陳ス
ハ又一ニ曰鄴中記ニ見テ云リ
六日　卵麹を製ス日ヨリ製法ハ如第ニ上ニ詳ニ
ニ記ス及ル
十六日　此日ヨリ蚊帳ヲ掛ル
しゝ八嘉祥と云ク紀明乃ヲ食ス和の比ヒ
ヲ御代乃さひ比ハ吉祥ニ毒ヲ除ク哭茂上の

年乃ヲ吉ヲ祈リテ此ヲ食ス
十七月十日ヨリ十五日ニ至ル吉日ヨリ
ハ嘉祥ヲ食ス年号ヲ改メ
て嘉祥ともの世ニ為ル
ちゝ吉ヲ祈リ
ヨ伝ノ又延喜ノ後ハ
大樹乃時ヨ二月納涼の乃そびりくヨ楊弓ヲ射
ル事ヲ吉ヲ祈リ
て食物ヲ裏ニ入ル
宋乃寧ヲ元年号ヲ改メ十七年ヨリ年毎ニ行ヒ

御よ元年より十六年までのあるいは十六歳の
はるかに今日一人ここのまてすまの俗をむかへ
たれ申侯たりのあるされとあるいはあるこせのほと
今物をあるよ四季折折の俗乃侯をたくさんいそのあり事
まるあり俗よ久しくたるすよ人俗のされとも近来
江戸江事ニ事根源年中ひすたるをもて侯まま
たくさん国史をたくさんまいあり事ここを覚て
侯れ侯ものの侯のくくちた世より代事ものや
牧 申朝の侯言ニたりりんんを行のを
晦日 法法 ひるこれ月をくんをの車たり世侯風俗ニ侯ハ

ここ秋この却ーたるとと猿をつる功能乃侯あり天
武天皇乃御時よりちーゃられり大猿と云ハ米猿つ
まく百官一同ニせしとやにてこの事ハ猿
ちゆうとそい
これ月ハあるこの猿を多人をもて世れいうち
のつてこいふまりとい言ととるつとそり注性寺
乃同ニの沙記ると
却の事ここれつにねてあるのとと侯りにさり
てこそ人侯ものといふ歌と猿すんしこと見ぬり 後撰集
集ておりり和歌 又延喜乃代 八月晦日大猿の猿祠

とのひらたとりのこれかけ彼と中比彼とゝ
ゝるよたる風
まくさ書のことんめ英ゝり六月ふ同月ゝ
いつぬこかいれやもいふよ後代六月よあるゝとふ
華京雑よ丸そすり又今日門系にはく麻代蒙て
人形と他を方代なてゝ方とゝゝてゝ
と物ゝ物ゝふ
八月ゝ御物ゝ六月彼形彼とたゝ方ゝ
ふなゝゝゝ
蒙れとけゝを
ゝ変歳川乃ゝ

こやえて人すり鉢にこれ月をくへしよ河系す
四ツ半ごろ月のあたとそこいてきりつと
六月晦日ゆうとしてとて四月いつ為へしと
ものをいつ乃酒よいてく乃月つくへ四月つくへ四人時
疑之古人六月之比必出門系作藏又納原及線
作之遊及諸物之異怪例也不限晦日是終時月
諸共えこは武人紀伊倉小金人可参時月藏
之中俵之仲藏之月十三日也 出張するれハ
強よ四ツ半ごろ
九月三俵しいるる俵人多くひるこせり九月中

夜三月九十日あ至いかくとり伏と金氣伏氣は
ちりは河のうつりうかおまとれてはまいあよ
ちくそ氏米よかたる水まかりない米ちり
まこれ本よりは本まを米ちりてて秋の金
あつる金まりたぐ秋を金ちりて夏の米ちの
米毛金ちて金ハ米ハ秋ちるあよ庚日ちりて
うるハは俵す庚を金ちり三伏とはなむ乃後
第三庚と初俵しる第四庚と中伏ちる五秋の後
第一庚を末伏とハあよ三伏と云元四十日極く
製す豚乃大きに殺さるなり 厚名秋よ

裏面数多後書と日よ脇をくゝ新薦よひろ多表
紙とおりて於す夢縄よ無くく脇をハ表の換す
天氣好日ものりを一日て一度なりくゝ新ら脇
一年未ハ悔む晩よハ暴毒の変たりたやく枝
ゝくゝ屋下よりくゝて鶏をさゝよ一夜こまて明
朔翁に納む元書を脇すす一家よ多脇とくり
ゝに暴毒のなりまあり又多ゝれハ家内厨ひ
使くゝと用ひす書をとりこなふすゝ換瘡
あくゝ修繕ゝ新くゝとち毒を獨ひ縫く毒故の
く換中に納者をとなせくて蓋と用へ

屋中に久くゝを脇くんよりかくれくく刻日に一度脇
たりゝ書をゝに濃のくゝをくよくゝ毎年久くゝせ。
をゝいをくゝ書に換瘡すくゝ古人を書と知よをくゝせる
くゝ見くゝりもをくゝを色なくの表紙を表なとりよ
をくゝ毒のくよをゝに居毒を用よくゝ古人書を毒
毒に多く蓋毒を用く蓋ををく今八七里香こ
也なり　但七里香ハ山蠻に生する木く蓋八又多動なり蓋八毒を
紙毒の毒ハ納ゝ納ゝ
乃ちの納ゝハ山やゝりて
紙毒くかりくゝへくゝ又麝香と書厨の中よ入毒ハ蓋紙
けく一けく掉脳を風ゝをよ
隱畫墨漬をゝ一時浮ゝ脇くくゝ毛濃を薦ゝ

浄紙をこのごとに重ねて縄のようけ年にかるる
なり久しく腐すへうる陶畫のうるとるすべし表
とさるすへうるひとくたる紙をもくひろくつさ
たるとまるべし抽よをき方と結をすべしこれ又
めをとれハ裏をもひ道をハ藏よハ四月の五梅雨の為ハ書
ことと知りひ畫図衣服をくハうくを封して表かびかず 類衣服をとをきくうしまい第一入
拭衣色てハすてよ濕襲よ薬されてうびろうまへとりり
甲冑兵器を布ゥもめん布とやるひて出付をうを然日風
腐すへうるを腐すへうるを腐すへうるを風に收あ奥氣をれん
て後雲母粉よ紙へ
衣服をを腐すへうる定綿をを久しを平へうるを又黄緑紅色

布の色をたがやうるの抽をを腐すへうるすこれと腐せを
又ゥ抽彩お義をを又月衣乃ゥひて色つきたるとハ
みれのけをひて洗へうるを痕をを桃枝のさねを
すりて細末して洗へハを痕月ををゥ屋風風
を梅雨ををびゥ衣服とハ梅雨と奥して洗へうと
あゥ又居をを俊ををく見衣服乃墨を汚ゥるとハ書
仕ハ法と細末ゥ礬茶と等分を合せをれゥをよて
ひ紙ゥ等温湯をて去めゥてよくをゥ付をゥ後
洗のくゥ又新天南星ををを綿のけゥ墨ゥ中紙
をくをれハ自去又口綿とをゥ付て洗てをゥ洗を

あらゆる衣服とハ滑石天竺粉各等分を末して
付粉袋さらの類ハ又付へしてしてして自然又
汚れたる赤ハ坪粉とひ粉ゆ 獎鬚汁にてこれを
のをへをれいちよう又塗と用ゆ洗て色よし漆
ゆけ分まてゆ衣服と洗ふハ杏仁門椒等分合と
研爛して汚れたる面と揩く浄く洗へハ自然又白
汚れたる衣服とハ冷水にてかくへハ然又白衣と洗ふ
ゆ蕓薹乃黄汁ゆ又ハ蕎麦を細末して水に
れて洗へハかくなりあり いと長き忘物
新しきまゆゆ葉樟を細ゆ包むゆ石をひゆ

見ふあてゆ腫しきさ後ゆ葉ハ毒ものゆ用ゆ平へ
手合方にハくく葉とさいく見に平ゆかれ葉乃
うちとくなりあまり南風風ハさる葉ハ熱ゆ
新瓦逆ゆ入ゆあくゆと対ゆ用ゆ平ゆ新して
又新ゆ年をあのれと新しきゆ九穀乃
葉をめゆとへゆとくゆ元世代人葉を薬ゆ貯へゆ保
獲ゆれゆ葉ゆ瓦ゆ事を志ゆ後業を花人を
表ひ病をいひ拭ゆれハきゆして收のたくゆ人平癒
乃ハ ぬきざるゆうにして獲と落ゆ屋一ゆ世ゆく葉の
ゆくゆゆ彩瓶を多くゆを葉とへゆくゆと法のゆく

はとをくすし重へ〳〵めしとれハ久〳〵くるてをかさ
うせい是葉とたをくハ良法をのり地黄ハ豆豉
羌活ハ芎藭ハ茯苓ハ神曲ハ黄芪ハ甘草なをハ
ハ酒ハ脳されハ鳥
ゝ酒たりをハ水をくさしをくるをかれ乳腫
をくなり少をり
寒熱を頓へをものハ黄くハ脳とへ〳〵うすたはみて鬱し
ゝ酒れ熱ハ脳をりかをれ薬をとハ日を脳へうすを
麻下ハ麻に熱く重へ〳〵薬をとも絡はをれくをま
ものをけ重へ〳〵薬をとをいをくハををと
ハ熱をされハ熱をむ薬ハ独を深をりを黄ををり

独中ハ黄ハ五倍子鉄漿して黄深をを黄ををれ
薬と收をを黄ハ黄芩の製湯ををく独勢と
頭へ薬ハとひ〳〵拾くと絡くこれと收むへ〳〵
をと絡てを頓す心宮ハ椒を黄芩を製〳〵れ
汁みく杜仲重をとを薬ハを深を又ハをと
潛痙鄭書をを又ハ遊乃汁黄柏の汁をを
浸〳〵てを〳〵重てを頓す又を秋乃月薬薬を
接骨と入重ハ頓ハ元薬ハを湯〳〵をり
じ月をれハ〳〵薬〳〵て俵俵をを黄れ薬をと俵のをを
へハ一家絡てを俵す〳〵農業接骨に元をり又生

魚類食たくとあゆ一よつりさけてとまい指せる
月今度麦あるとせうゆ又青生姜とねぎよ麺を
うどんのてくこねく間とうかやよつこ油のゆよ入
玉ハ久しく指麦麺ゆ俵とのて食べくしゆ
二月廿四日ゆ見てうゆ又臓雪水を所玉てうよ生姜
と浸し玉ハ指ます
六月ゆ麦したゆ茶とそまくとけハ味ゆくく等て
牡蠣ゆくゆ酒ゆ又ゆうとうよつくゆと能ゆ
ぶ酒と茶こ井のゆうとうよ麦のかしゆに
ひらかとゆはきけ玉ハ久しくゆてを敗ゆ

酒をかくよくくをくし
九月ゆ林ゆ山ゆ不ゆ彩と多く保存ハ山椒ゆ
不ゆ多く買帰玉ハ京ゆ九蛸ゆうゆ新て蛸て
ゆ一又煮とも買新ハ
茶瓶と多買ゆ茶と蛸ゆ一蛸ゆ洗ハ
○鮑瓶とこうらゆ法 瓶とこうゆまゆかゆこと去ゆ
瓶ゆ岸ゆ玉ゆの月八九ゆ月ゆ塩と入一夜ゆ指とうけ
翌日ゆ水ゆ一ゆうゆ一日ゆくゆ日ゆ
久しくゆまゆうゆ又赤鶯ゆ法ゆうゆ八ゆ
後ゆくし

○瓜と糟淹のしかた　世俗よりいつけと云瓜と云
ものゝ子種とるにくらべてこそあれ〻ひてあ氣
乃ちたやうなかへうり瓜乃片はれの間に塩八分ぬ
かと入瓜五つくらべ九分間を入桶に入すくと〻紙
をけ二枚ほどくらべ石おもしを置けてあるひて塩け
乃かくなるまくに日よりあり〻さく瓜に糟を多くあるいは
せとに瓶に入れて瓜のつきあらぬやうにてろれ
うに塩と重ねおきしたるこくに至る糟にも塩ぬ
まぜくらい大抵糟三升に塩八合をまぜくらい
糟多く瓜をくちたがるに瓜多く糟すくちたがるに

俗の瓢にすに瓜とはくくり瓜ぬかとつくるものの
ものといふ瓶のひらぬやうにまきてとと
赤土ぬりぬりぬ〻しく桶をひろきゆく瓶八器と
きにつけろうるもの桶につきてとをさ
男とよくこくしく瓜ハこれくらつけくつきち
うるし又紅屋茄子ぬかをも一二枚塩に一けを押と
うけくけとあり糟にけれハ糟美なり
瓢茄子ぬかをと平把こうし武塩淹にして貯重し
○乾瓢乃製法　好天氣とうくひゆふとと上皮と
こうきて糟に切こうぬかとをうくぬまりて

あつ入へ中後元ゆにて縄をうけくりひきまわり燒よ
天窓すしくいたのこくに水よ入天氣好所元年一
縄にのうまくを出へし能ひらる所壺をよ入ゆうめ
重へし　大氏こくに切て後沸湯とうんくこの世い
交益紀ゆるしとこに味あへし
○塩辛瓶乃製法　瓶を大片ゆ塩よつゝて中と
うを重ゝ入てを日れてうけ元あしりて後つわ
こゝ入納ゆまり性常のうに中ゆ百年ゆ熟す
○乾茄子の法　まうを茄子を元ゆ入こ天よりう
て千重東ゆ所所ゆ乾ゆくひらうして蓋

加へし　地ゆ和ゆ茄子を埋ゆ炉の原よ
ゆ重ゆ八久しく蒸てつけり
○紅豆醤油の法　米麹ゆ塩ゆ水ゆ合くつ
うを紅豆と共ゆ蒸ゆ醤とけゝ入しく撹せす茄
子を入かくれとくなへと熟すし
○月醤油乃製法　大豆　塩各一石　水二石二斗
内二斗ゆ
煮て　先大豆をあつさく粗ゆ麩ゆしつて
石臼ゆくひうう大豆と麦乃とく煮て大
麦乃粉とうゆ世麹ゆ麦のひろ市土ゆ入麹と
なす麹麻乃紙ゆくる所右ゆ石ゆ斗乃ゆて塩

一石といれ大釜ふくらく煮うを塩湯を大うこれさま
しもやまをひらしてをあつらさらかとなり時鯛を
俵へあり さあてをこうし絞り入をよくく拌初より
家氏内を重ねうし表ハ日加を重てを後
四を元人をあり塩てを上お入ハてうう流入て中
ハ日ハ色ハ鰹と入へし在氏鰹を入ハ白米を
を水八年入粥を煮て塩を入ハく拌せを冷ハう
四大氏習酒飯を入ハり ハて日数三十日ハく酒と
ハをハく ハうまう桶のうハを元とあ者を桶
を入ハく元ハりを入へし上ハ中ハと盛へし初

作ハ一日より九七年ハ中ハて作ハうつをりハり
流を去ハり乾ハく後美味ハ指ハ昆布と切ハ金ハ
味ハくなハをり

○ひしおの製法　大豆壱斗 大麦壱斗 塩壱斗 水壱斗

麦ハ炒ハて粉ハ豆ハ煮ハ引ハり皮
と去ハ麦ハ炒ハ也ハ豆ハ麹を水
ハ四日ハ塩ハ入ハ麹ハ黄ハ作ハ入ハ
作ハ大ハ後日ハ後日ハ味ハ出ハ瓶の
口と紙ハ封ハ重ハ置ハ日ハ後ハ去ハ
味ハ出ハ家ハ中ハ麹ハ入ハ黄ハ合ハと

とうこう瓶の口をとぢ
○漬豆納豆の製法　豆を小麦粉にて先豆を
しるして豆をよく煮熟し中麦の粉と衣とし
ふ入麹をすりまぜて水に塩こまかに入て能煮て
桶に入さまし大豆麹とくるこねて塩けの内に入又
麹に生姜の搗皮薄皮たてとこまかに刻てまぜ
こと麹と一所に塩けの内に入ふたをして
をくに豆は塩けうくとそのまゝ豆の内のくに
七八十日をへて味よくなりて麹味噌を
おきてまるひまをかけて壺に清免豆へし

○又納豆の法　大豆壱升大麦壱升塩壱掌大豆をよく
煮熟してよく煮をすりつぶして粉にし大豆粉の
中に拌むれとうけく一夜置次の日麦粉に
土壱升に入かうしに移をしてよく後塩と入水に
よく入て七日ゝ置辛度さんをそのまゝ煮熟
の朔麻薄皮をと入三日ゝ坪にとうけく置て
日よりして又坪にとる置て内にあるとつきをかけ
○金山寺麹の製法　和州吉野の名物也大豆一斗入て
引ちり皮と去麻く細くをかしへし大麦一斗
能煮て麹にしく洗をよく清潔に大麦と麻稿

乃大豆を一つゝして蒸し熟したる時細末の麦粉
を拌世土に入れ麹となしさて麹席の付
へき一日前に苅て干らし白瓜これも皆知れて
苅る事もあり洗ひ
合大麦を瓜と共合乃塩を合せ桶に入れ
一夜置明る日あるとき麹を少し瓜苅を
物切にかきまぜて桶に入れ上に重石をかけ置
毎日一二度宜敷拌せ十日許にて後蔕
を拌ぜ小椒種蓼を常蔕と他物とを拌又あの
ごとくにして重石をかけ置毎日かきまぜ七十日
過て用へし三四十日に及へは酸味こゝろ深
かる

立味いかゝ言うれ人乃ゆゑよりて
○茅屋醸の製法　醸し酒に米を合せ蒸て
醸こと四日人は月土用乃中蒸熟して加水置
実日より脇一七十日をつくこれを用ひるの
たるを酒と水と等しくつて入毎度加味をれいゆゑて
ゆゑ有る方を醸して又苦酒乃義を別てあり
うを入れ置いて義をとゝ数をるゆへ苦酒醸しもいふ
日和よりの時梅雨に換壇したる壇壁を修理をして又
海根乃宅を畢をる時井を浚へ泥をとり去て
泥砂を入へし此水乃氣味をよくなる

元刀剣験之刀鍛冶と呼月を愛ぬくいされい鍛冶
夜常の時をもりくぬらつくし又此月名称る衛
ちをみりくし
文月故事と書法　菱米　豆　本醤に二十ヶ　雄黄　二文半　別所　竹上
細末して蜜にて雄黄丸をうれと焼と居忠
沢瀉と竜乃骨を焼ハ蚊時発るゆえれ
骨すとべこ門魚の骨い焼こい時蚊と去又
沢瀉と菱沢と焼てもすと月令廣義に見え
こり又千金月令にいめ月を沢瀉と為く陰平ま
雄黄ようまりく焼こい蚊を解と去るもり又骨

又白四年の沢瀉と名れ蚊発し仮黄丸無とをくこれを
漬し又蚊し又漬すぬとるる蚊を殺して後未して
寄こ寄こ焼之大ま蚊蚊と去と居忠沢瀉ちり
麻の葉とけりこ蚊をさるる物ちれ武
毒ま乃えこり和病ま樋乃末とにくれこくく蚊と
さるるものなりかやこ刑ざるもかり乃末といさるの
なりこし古今集色乃歌ま
夏年ま思いやとにあるるかつ中氏ゆまてる
乃ちをえるもん　時令大米蚊乃法ま
宋旧拝廟摩羅去蚊蚊薬蚊卵伏藤

○又蠟燭をかいまくなるを粉糸をひてうへはかく
さいはつれをくるを和歌をよみてうたうまた
こゝ首尾乃事を席乃ちよひ移る又ちやうぶ乃葉を病
つゝくを庭をちくしと月令廣義より乃そてう
五月乃月世人是をかあてゝ毒を除ん或蓮の中をく傷を
病くをする事ゆうをれを中暍をも暍死をも傷を
これを霍乱といふあやまりなり山家人をゝ水をひ
やをくうゝ水ひや世界時より氣をるものゝ湯湯をよ
めくいるをよをゝ腸の乃をとあをゝむへしをゝ
遠市をて死ゝ人事をなをかゝの故上の製をを知

腸腹の乃をよをゝ人をゝしてをの上に屋をゝめ又薑を
大蒜をつゝ燭をゝ製湯をて送下せい即活をれ後
葉をあゝ人に保ををををへし
夏秋乃天氣熱をくを清汗嘔吐力労過をををゝ
生脉散を服すゝし病ををゝ人をゝ病をゝ清暑益氣
湯参芪黄芪元湯等を服をへし又異月に葉を服
をゝ生脉散を代へし方書より乃ををゝ
黄芪 麦門冬 人参 白朮 当帰 各一分 五味 陳皮 茯苓 甘草 五味 右十味成
白扁豆 各一分 五味子 五味 陳皮 茯苓 甘草 五味
加蓮肉 一分 薏苡 一分 甘草 五味 右十味成

元慶の時藤原氏を保護して僧を殺戮するなかれ
寿世保元にいはく六月三日房勝仙桑亭旨又孫真人
のいはく夜間張乳内より伏し異毒かと蒸すんよ
せうこ風るあるより冷酒と食よあるよ暴泄れ蒸を生ん源
脹なる物と食飲して大よ飽るなかれ
酸葉紫苑なるこの日よりいもあるを洗るよい蒸を洗る故
てあるものよ洗へし屋日中の葉に点滴水をそけい
冷熱おの通て紙弁ものよ拭ること月令廣義よ乃元ようと
老圃乃云ふ物よ地蒸さめたる時あるを洗へるべしあるを
洗へくよりと但晩ふ云おろく洗朝ふそろく洗へし

月令廣義よいはく六月よ桃楊よ水とろろ紀土とろい茅
乃原羊の糞と雞へ糞へ云ふ
秋の比鵰鳳伏ものくいハ所のうしめを細とかし梅面と
固くし茅瓦乃梅と呼くとしし又楊梅末と細へし
比月雞と食へハ目と賢す羊肉とくへハ神薬と傷ら
蜜鳥鳳鷄菜蔓と食るとと又生蒙と食へハ水瘕
とかるたのみるよ噬るれハ絶分蒸とかるし冷食と言
用し冷水生破果池臓酒食とる食するるなかれ
風蒸炊燻蒸乃砂味を宜くめく用へし月令廣義
元文乃百雑瓜とる食するなかれ瓜のみよ入て沈

このハ大に毒あり月令廣義ニハ之を又いそくぬ
菊乃瓜ハ人を殺又油餅と共に食へハ決て命を亡
威志ニハ瓜ハ白梅と白く煎と合して食へ後
白梅と食しまた麝香をもて瓜と漬ル又石青
魚と魚食ハ能瓜と消して水となるとなり
六月乃六候第一濕風至第二蟋蟀居壁第三鷹乃
学習 太小暑乃三候なり第四腐草為螢第五
土潤溽暑 第六大雨時行 太大暑乃三候なり
小暑節六月新二十分夜三十九刻四十分大暑節五十
八刻二十分夜四十一刻四十分月令廣義

土用 もろこしハ土旺と称す
又土王をうけ
春ハ木旺しなハ火旺し秋を金旺し冬を水旺す
五行乃うち土ハ四時ニ旺すとなり
故ニ完れる信なるなり氣なくして四時乃
物をう辰未戌丑乃月の末ニ寄旺をうる者
十八日一年ニ六十二日なり此七十二日とのう
ちに四時乃末ニ金水を又各七十二日づゝ配
一年を五ツに分る故ニ土を末と称ス故ニ土
用ハ春夏秋の土用を土衰并て威なり冬
乃土用ハ水と称ス

用ひ中央に金を置き四方より麻を
の上に置くべし土を置けば土を金を生じ
麻を秋乃金を土より生ずるなり未だ四方の金の
百日ばかり又一葉乃中央に置くれハ中央の土一金を
生ずる揺くべしの席となれ乃ち麻を百日金を
重ねて次に中央の土をのきり 秋國信土原の百日と
ところ〳〵その法なれハ
それ程なるべしやう
信法に六月土用に入日蕪及赤小豆を食ハ疫疫を
除くべし今の人ハ蕪を乃菁菜ハ源氏物語
てねぢけさうやくをまろよ

ばう宝鏡に法をまうやくを蕪なりと法れハ
へまりをけりをなりしたるもとれ如法を
所に中央より蕪頭ゆをく芳人正月若食五辛
以辟厲氣 信蘿蔔蒜韮薑也又脚法方に元日及
人日麻子小豆各七枚を煮を疫疫を消すと法り
これこの家初のまなひ事と乃をうかの
事と法へあやまりて六月よりするも狂地獄乃
人よ多あり
六月土用乃中に採べし
六月土用の内に鼈と法を分解を人〳〵泥濘下

血乃久しきやまぢを聞くにつけ御行ひ
養ひたる病人は勿論命絶ゑ羸と弱小男子
を書まく欲てよし

以本家所記巻之四畢

字書品目 定榮堂 吉文字屋市兵衛

早引正字通 大本増補 真字引 全

真字書引ニテ字ヲ見ルニ甚早シ是ニヨツテ早引ト題ス早キ字ノ引ヤウ委ク右ノ本ヲ見テ知ベシ奥ニイロハ引四躰千字文其外文字ノ要用ヲ集メノス

唐詩選 上ノ三書之熟

七才詩集 **字引** 字ヲ副シ文字ヲ正シ誤ヲ改ム

絶句解

四聲字林集韻大全 全

小補韻會 全四十冊

大廣益會玉篇頭書 毛利貞齋撰 十二冊

初學指南抄 毛利貞齋選 学文ノタヨリニナルコヲアツム

卷懷韻鏡 折本懷中本

無相文雄師閲○長ク廣ケ見ル時ハ文字ノ韻明ラカニワカリ便利ナル呑ナリ

廣益三重韻 小本全二冊 并薄用摺合本

唐音附改正増補此廣益大ニ他ノ三重韻ニ〆サレリ

増益伊呂波韻 文字訂正熟字全 全

四季分平仄附袖中節用集 懷中小本

文字ヲ正シ假名遣ヲ改和哥連俳ニ用ル字ハ春夏秋冬ノ季附ヲレスベテ一字毎ニ平仄ツケ万事ニ通達ノ節用ナリ

急用間合即座引 節用摠徑 懷中小本

字ヲ御引被成候ニ至極早ク御座候其訣ケハ是迄有來候節用ニハ弘法孝行光明カウホウカウカウクワウミヤウ三巻ニ入候故何ニ有候ヤ分ガタク尋候ニ際入申候此本ニハ加様ノ字ヲギラハシカラズ即坐ニシレ申候其外字早ク引ケ候様委ク本ノ口ニ記シ置候御覧ニ御求可被下候